

総合英語Ⅱ(リーディング授業)の一環としての 多読とその役割

佐 藤 明 可

Extensive Reading and Its Role in the English Class from Kogakuin University

—— In Pursuit of Student's Motivation ——

SATO Tomoka

1. はじめに

グローバル化に伴い英語の需要は益々高まっており、なかでもリスニングやスピーキング重視の傾向に強い今日であるが、多量のインプットができなければアウトプットも出来ない点からリーディングは大切であると考えます。情報科学技術や経済の発展に伴い、文系の学生のみならず、理系の学生にも一層、書き言葉の情報を的確に理解する力が必要となっている。にもかかわらず、一般的に英語を苦手とする（あるいはそう思い込んでいる）理系の学生を含めた英語学習者のリーディングの認識といえば、下記の通りである。

- ・ 受験のために読んだもの
- ・ 教科書は教師が選ぶので興味が無い内容が多い
- ・ 個々のレベルに関係なく同じ教材を同じ速度で読まなくてはいけない
- ・ 語彙と文法を覚えるためにテキストが使われている
- ・ 難しい単語が多く使われていて目的はそうした単語を覚えること
- ・ 語彙は単語集で先に覚えてから読み物に取り組む
- ・ どのくらい内容を理解できたかテストされる
- ・ リーディングの後には文法と語彙の練習問題がある
- ・ 新しく学習した語彙は、後の章ではほとんど出てこないから忘れやすい

以上のように、リーディングとは単に言語の知識を増やすことだと考えられており、多く

¹ リーディングに関するアンケートを2005年度工学院機械システム工学科の総合英語Ⅱ，淑徳大学国際コミュニケーション学部人間環境学科，文化コミュニケーション学科，経営コミュニケーション学科の4クラス行った。全回答者数107名である。全て一年生対象である。

の学習者は訳すことが英語を読むことだと思っている。¹ それゆえに、未知語や未学習構文が現れると理解不可能なインプット (incomprehensible input) となり、①読む速さが遅くなり、②読むことが苦痛となる、よって、③読む量が少ないという悪循環に陥るのである。

現在の情報化社会のもとでは、多くの様々な英文を読む際に、文法を解釈し一語一語訳していく読み方（以下、「精読」）よりも、書かれている内容の概要や要点を効率よく理解する読み方（以下、「多読」）が適していると考ええる。また、多読は、学習者が興味のある英語を読み、自分のレベルに合った本を選ぶため、英語に自信が無かった学習者にも抵抗感をなくさせ、「自分にも英語が読めるのだ」という自信をもたせてくれる動機付けとなりうる。読む流暢さや自信をつけるという意味で多読の意義は大きい。つまり、理解可能 (Comprehensible input) な英文を読むことで、①読む速さが速くなり、②読むことが楽しくなる、よって、③読む量が多くなるのである。その結果、学習者のリーディングに対する態度をより積極的にし、総合的な理解スキルを一層伸ばし、広範囲に及ぶ受動的かつ能動的語彙を学習者にもたらしってくれるという良い循環が生まれるのである。²

Learners need large amounts of comprehensible input in their new language in order to make progress toward overall command of that language. In this way, extensive reading benefits not only reading proficiency but overall language proficiency as well. (Krashen, 1982).

多読による英語教育の有効性は内外で研究報告されており、その効果は認められつつある（金谷、橋本、酒井&神田, 2005; Elley & Mangubhai, 1983; Hafiz and Tudor, 1990; Mason & Krashen, 1997; Lituias, Jacobs and Renandya, 1995; など）。

工学院大学では、現在、まだこの多読のアプローチを積極的に取り入れていないため、昨年度より自身の授業に試験的に単独で取り入れた。本稿では2005年度に実施された多読の成果を、①学生の意識変化をはかるアンケートと、②多読前と後のリーディングテストの結果を中心に報告する。³ その際、先行研究の結果に照らし合わせ、工学院大学での総合英語Ⅱ（リーディングの授業）の一貫としての多読の役割や意義、効果について考察する。

1.1 総合英語Ⅱ（リーディング）における多読の方法

まず、授業用の教科書とは別に多読用の本を用意するにあたり、初回の授業で多読の意義を説明し、読み始める一冊目を様々なジャンルとレベルの多読用の本から各自に選ばせて購入させた。（多読アプローチを行っている大学ではすでに図書館などで揃っているので購入する必要は無い）その際に、どのレベルからスタートしたらいいのかを知るために、各レベル

² Davis, C (1995)

³ アンケートとリーディングテストは淑徳大学英語教員作成のものを工学院に使用した。

の1ページをコピーし難易度を確認させた。2冊目以降は学級文庫のように廻し読みを行った。レベルによっては、1ページにつき50語に満たないものもあるが、個人差があるので語字数でなくページ数で100ページを各学期（前期・後期）の目標とした。テストをしない代わりに読書記録（要約や感想）の記入を各学期に4回義務付けた。（付録「読書記録」参照）この読書記録は一回につき5点満点で評価を与えた。しかし、この評価基準はそれほど厳密なものではなく、きちんと書いているかどうかであることに比重を置いた。また、読んだ合計ページ数が、指定ページ数以上であれば成績に一定の加点を行った。（20ページごと1点。しかし最大5点までプラス）定期試験と読書記録の両方を合わせた成績を最終的な評価とした。

Day & Bamford (1998) の多読10原則や Start with Simple Stories and Enjoy Reading: SSS 英語学習法研究会の多読三原則などを参考に、おおまかに次のような多読方法を奨励した。

- ・自分のレベルに合わない難しい本やつまらない本を無理に読まない。途中で別の本に変えても良い。内容の趣旨を把握することに主眼を置くので、分からない単語が出てても辞書は使わない。（飛ばし読みしてもかなわない）
- ・読んだ内容に関しての理解度を問うような課題やテストは基本的に行わない。
- ・ただし、読書の経過を記録するため読書記録の記入を義務付ける。
- ・読む教材のレベルは自分のレベルかそれよりやさしめのものから始めることを勧める。
- ・教師は学習者の多読の進捗状況を把握するため適切なアドバイスを与えるための個人面談を取り入れる。

多読はあくまでも、授業外のあいている時間を利用して行わせたので、授業中では一度も多読に時間を割かなかった。

1.2 教材

Oxford の Graded Readers⁴ の starter と stage1（Graded Readers シリーズの中で一番やさしいレベルとその一つ上のレベル）を基本的な教材としたが、自身が所有していた Penguins publishers の Level1～3 を途中から導入した。今年度は昨年度の学生が寄付してくれたお陰で、各社の（Cambridge, I can Read シリーズなども含む）教材を少しずつであるが揃えることができ冊数的に年々充実してきている。

2. アンケート調査結果

2005年度の機械システム工学科総合英語Ⅱを履修している27人を対象にアンケート、リーディングテスト（定期試験とは別）を実施した。このテスト結果は、成績には含まれない。

⁴ Graded Readers とは、英語学習者がリーディングの力を伸ばすために書かれた本。文法や語彙を簡易化して内容を理解しやすくしてある。語彙や文法レベル別に制限して、難易度を数字で示してある。

2.1 総読ページ数

27人中3人の生徒を除いて指定ページ数200ページ（前期・後期併せて）を達成できた。さらに、14人の学生は200ページ以上積極的に読んでいた。（学生の報告について虚偽はないという前提である。）

この総読ページ数を先行研究と比較解釈するには慎重さを要する。これまでの研究では読書量が本の冊数や語数で報告されている場合が多く、単純比較は難しい。また、授業の時間を多読にあてている学校では当然読書量は多いわけであるから、やはり一概には比較できない。しかし、それらの条件を差し引いても圧倒的に多読とは言いがたい量であるのは間違いない。仮に語数で換算したとしても、工学院の学生が好んで読む starter レベルの本は、通常一冊 25 ページであり、700～1500 語である。仮に 200 ページを読んだ場合、5600 語（700 語×8 冊）から、12000 語（1500 語×8 冊）と試算される。多読を推奨する SSS 英語学習法研究会では100万語単位で読むことを目標とする多読法で、年間で100万語から200万語を読むことで英語力がつくとしている（酒井, 2002）。しかし、年間で 100 万語を制覇するのは、余程多読に親しむ学生と、多読が授業として確保される環境の下であるならば可能であるが、授業外で行わせているだけではあまり現実的な語数ではない。従って、より身近な指針が求められるのである。その意味で、高校 1, 2 年生を対象に行った多読指導の結果、300 ページ以上読破すると生徒の模試の成績が大きく伸びたということに着目し、300 ページを多読の効果が表れ始める一つの閾値ではないかという定義もある（鈴木, 1996）。しかしながら、これを参考にしても工学院の学生の読む量はまだ少ないと言える。

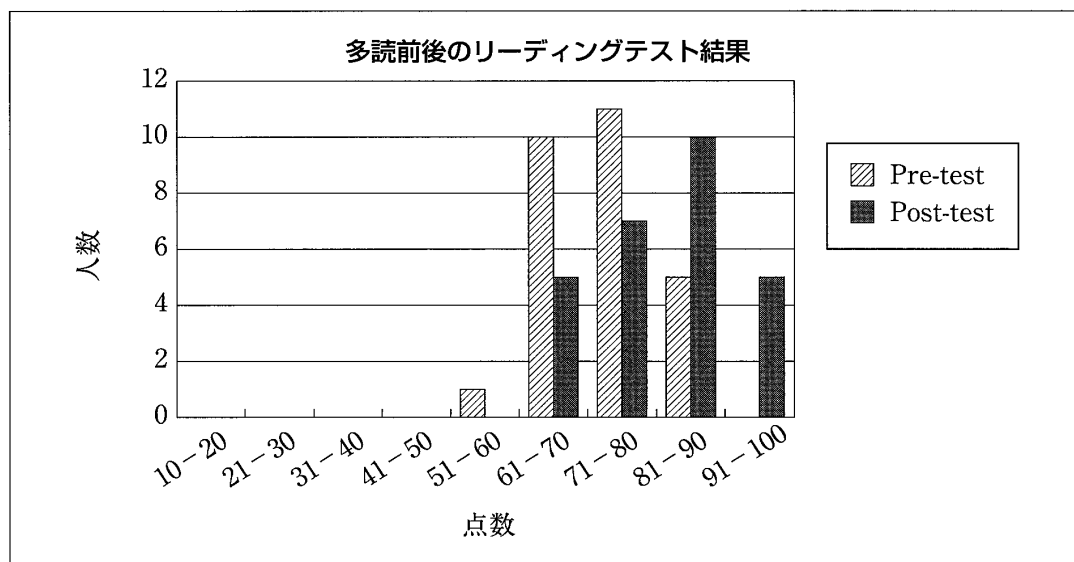
無論、このような数字は経験に基づく目安や仮説に基づく試算に過ぎないので、その点は考慮にいれなければならないが、漠然と多読を奨励するだけでなく、一つの指標として具体的な到達目標を設定することは意義があると思われる。そこで一年生の英語嫌いと思われる学生に負担に感じさせない、「これなら読めるし、また次の本を読んでみたい」と思わせる感覚を掴ませるため、各学期に合計 100 ページの多読を目標として設定した。その無理のない目標設定が功を奏してか、単純に読書量を前期と後期で比較してみても、前期は目標の 100 ページまでしか読まない学生が大半だったのに比べ、後期は積極的に目標ページ以上に読む学生がクラスの大半となった。

2.2 読書量と英語力の伸びの関係

読む量が多ければおおいほど、英語力の伸びも大きくなるであろうことは研究の裏づけによらずとも容易に想像できることである。多読によって英語力がどれくらい伸びたかどうかについて、リーディングの pre-test と post-test を 8 ヶ月後に同じ問題で実施した。問題構成は英検 4 級のレベルから準 2 級のレベルの読解問題だけから成り立っている。よって、特に一般的な業者試験のような各セクション、例えば語彙のセクション、文法のセクションごとの数値はせず、学生一人一人の弱点などは測ることはできなかった。今後、具体的な伸びを測

る上で必要となる点と言える。テストの最後の読解問題は一読したらタイムを計り、読み返さずに問題を解かせる速読の問題を含めた。「多読」と言えるほどの多読の量ではないが、グラフ1からも明らかなように、多読を行う前では60点台と70点台の学生が半数以上（21人）を占めていた。多読後は70点台と80点台の学生が半数以上（17人）を占めたうえ、90点台も少数（5人）ではあるが見受けられた。同一の問題ではあるが、Preテスト実施時に問題と解答用紙を回収していることと、Postテストを行うまでに8ヶ月経過していることから、テスト結果の信頼度に大きな影響があるとは判断していない。無論その他の外的要因は考えられうるが、一定の多読の効果が表れたと考える。ちなみに、北海道教育大学函館校で社会文化情報専攻の1年生25名を対象に行った多読授業では、授業内外で多読を進めた結果、半期でTOEIC Bridgeを使ったpre-test と post-test でリスニングとリーディングに有意の向上が見られたと報告がある。

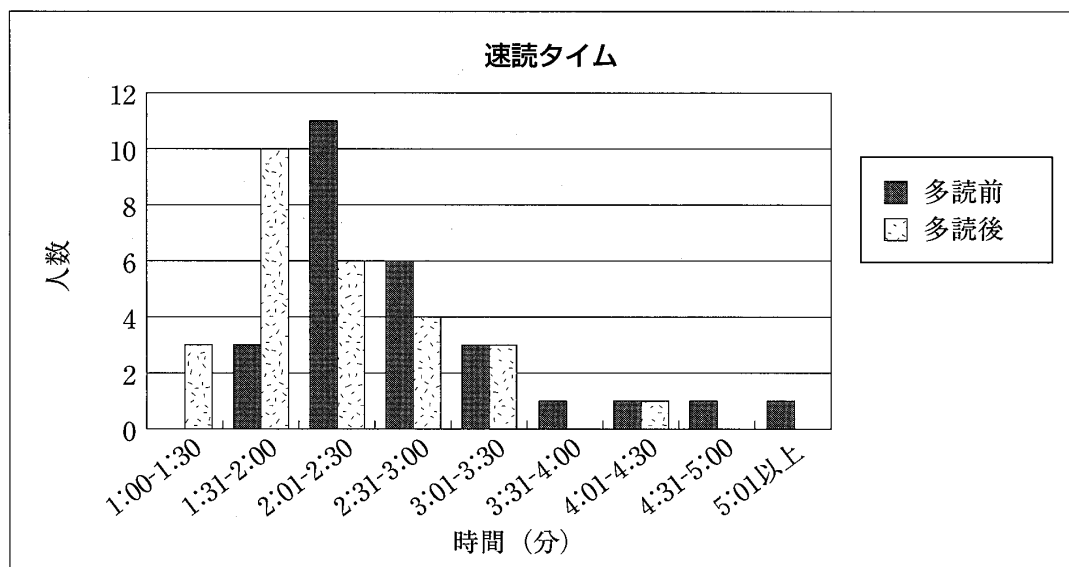
グラフ 1



また、読む速さに関しても興味深い結果が表れた。185語から成る文章を読み返さずにどのくらいの速さで一読できるかについてもタイムを測った。（タイムは10秒単位。学生による自己申告制。）

グラフ2からも明らかなように、タイムに関しても伸びが見られる。おそらくこれは、多読の要領で読む習慣がついたということと、普段の授業でのリーディングでも一語一語訳さず、タイムを意識した読み方を奨励している成果と推量される。

グラフ 2



2.3 多読の効果一意識・心理的变化

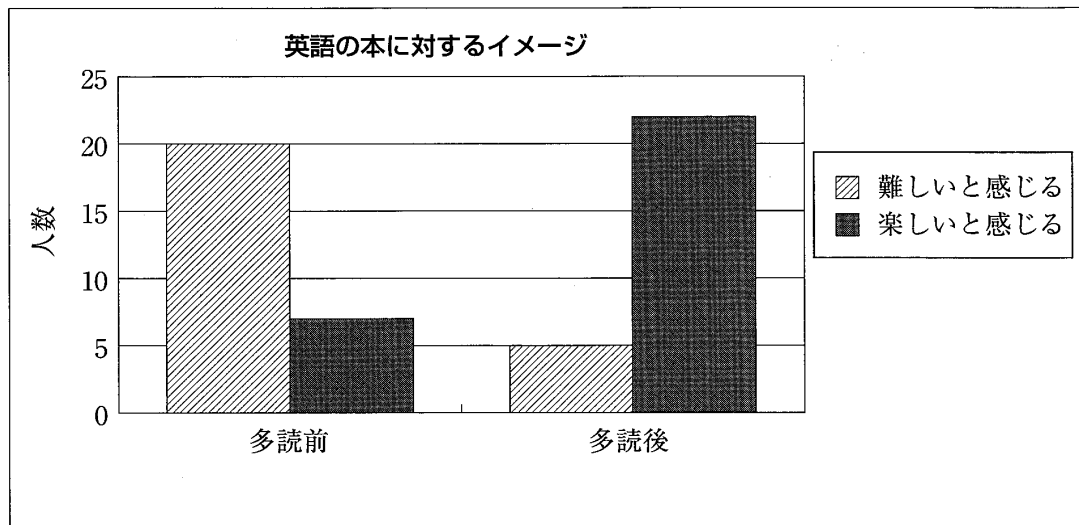
客観テストにより英語力の伸びから判断する定量的効果とは別に、数値では表すことの出来ない定性的効果もある。つまり、英語への興味をもつ、あるいはさらに高める、達成感を得る、自信がつくといった心理的な効果である。このような効果は多読に関する研究において指摘されている。⁵

実のところ、英語を苦手とする工学院の学生に英語力向上より、むしろこの定性的効果を求めて、多読学習を始めたのである。工学院の総合英語Ⅱを履修した学生も例外ではなく、大多数が多読を肯定的に受け止め、英語に対しても前向きな気持ちになったことが下記の結果より確認された。

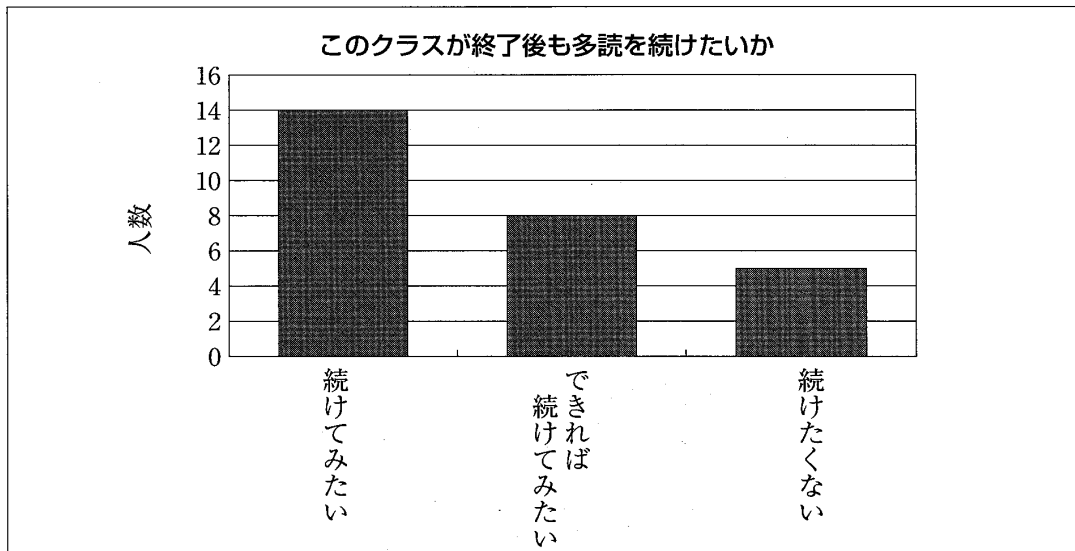
グラフ 3, 4, 5 - 1, 2 は英語で書かれた本に対する心理的变化を示している。

⁵ Mason & Krashen (1997); Krashen (1997); Nash, T., & Yuan, Y (1992); Day, R.R., & Bamford, J. (1998)

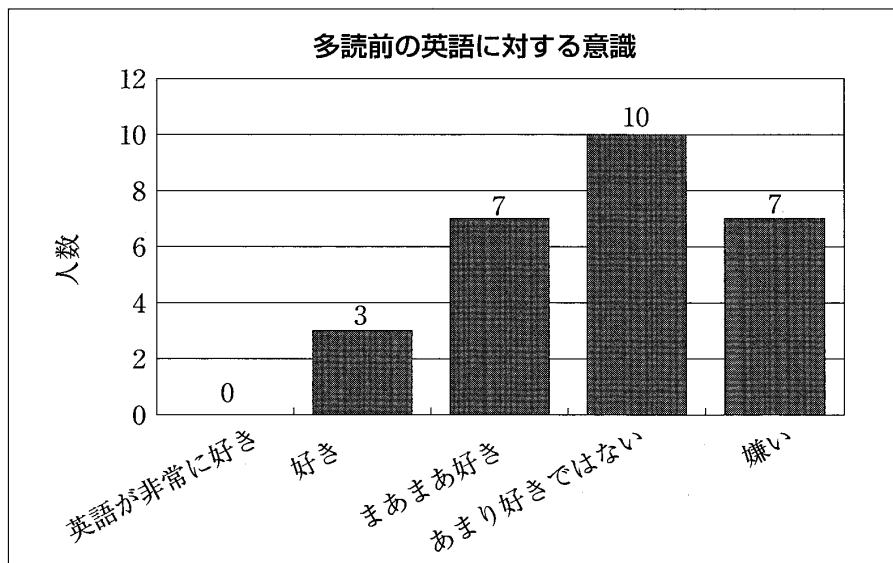
グラフ 3



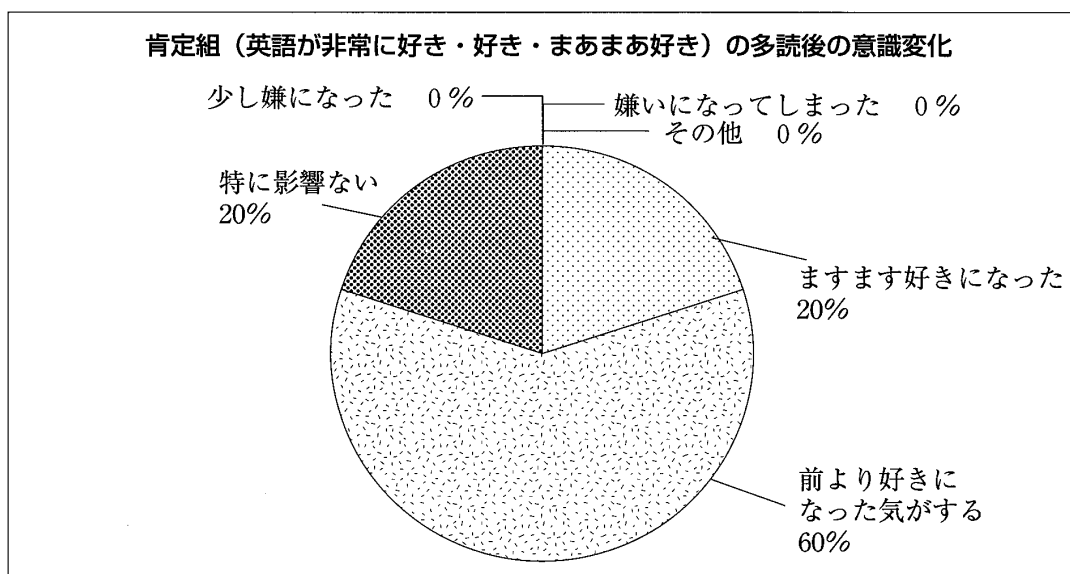
グラフ 4



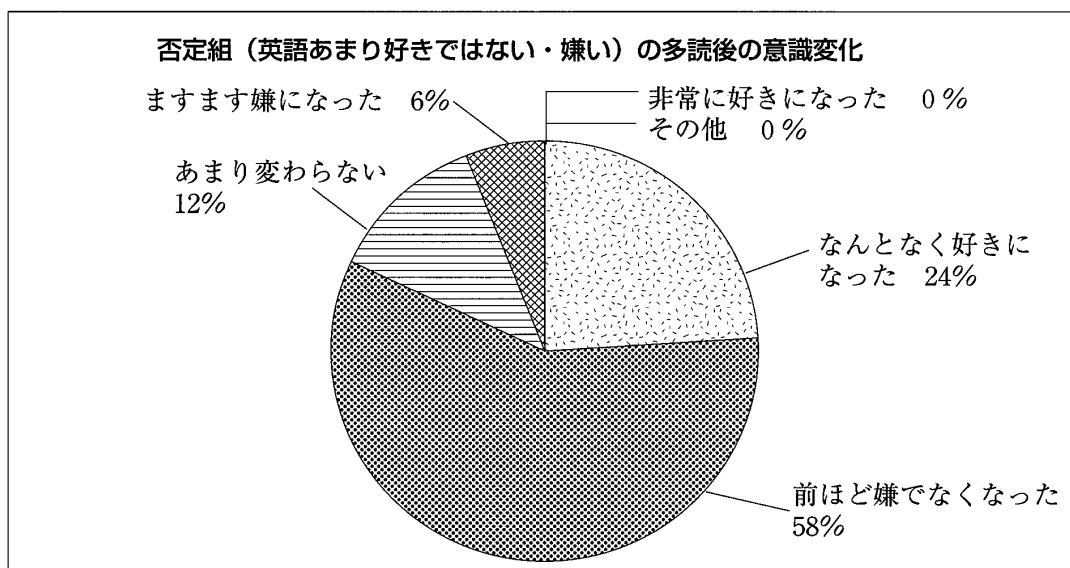
グラフ 5



グラフ 5-1



グラフ 5-2



2.4 読解方法の変化

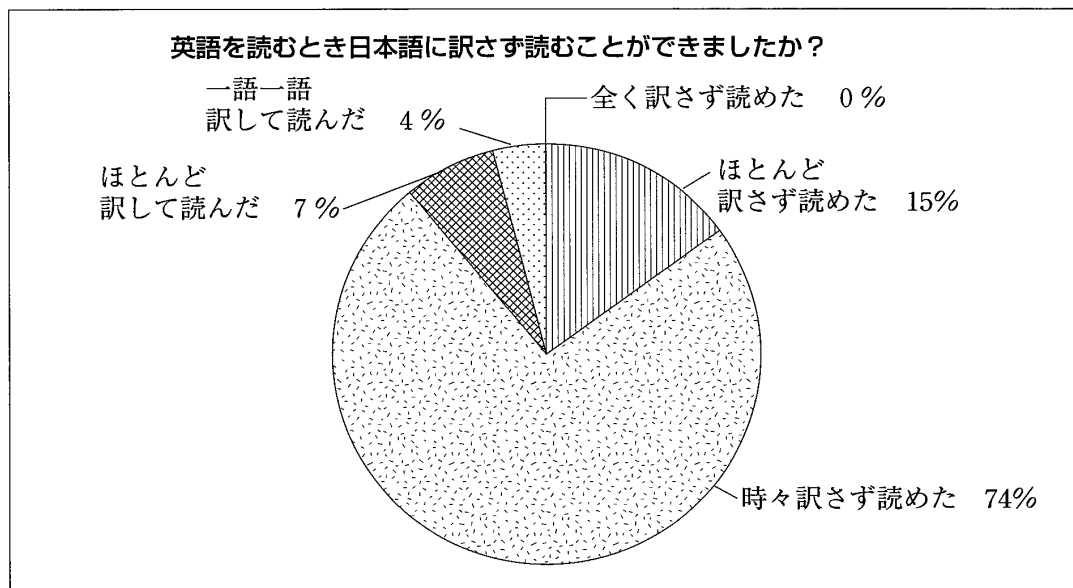
英語に対する心理的変化のみならず、直接英語力に結びつく読解法の変化にも注目したい。学生の読書記録の「リーディングの変化」の欄のコメントは、「わからない単語があったが話の流れから推測できた」、「読むスピードが早くなった気がする」、「本の中の挿絵から、単語の意味を推測できた」、「英語を日本語に訳して読まずに英語のまま理解することの意味が少しずつ分かってきた気がする」、「わからない単語に拘らなくなった」などである。

特に、従来の日本の英語学習法では訳読中心であるため、文法を解釈し、英語を日本語に置き換えることが身につけている学生が、どのくらいその呪縛から解けるか注目に値するが、結果として「全く日本語に訳さずに読むことができる」、あるいは、「ほとんど訳さず読めた」

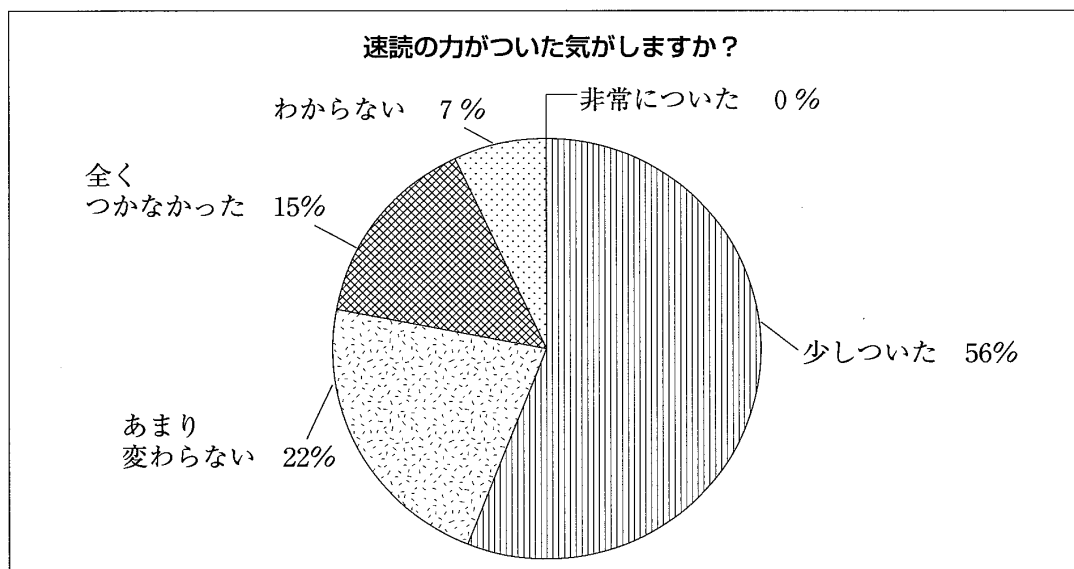
という学生は15%程度で、まだまだ日本語に訳す癖が抜けていない学生が多いことが分かった（グラフ6）。この点をどう指導していくかは今後の課題といえよう。

また、速読、語彙に関してどの程度効果を感じられたのか訊ねたところ、速読に関しては、グラフ7からもわかるように、ほぼ半数以上が向上したと自覚している。事実、先に述べた客観テストによっても裏づけされている。

グラフ6



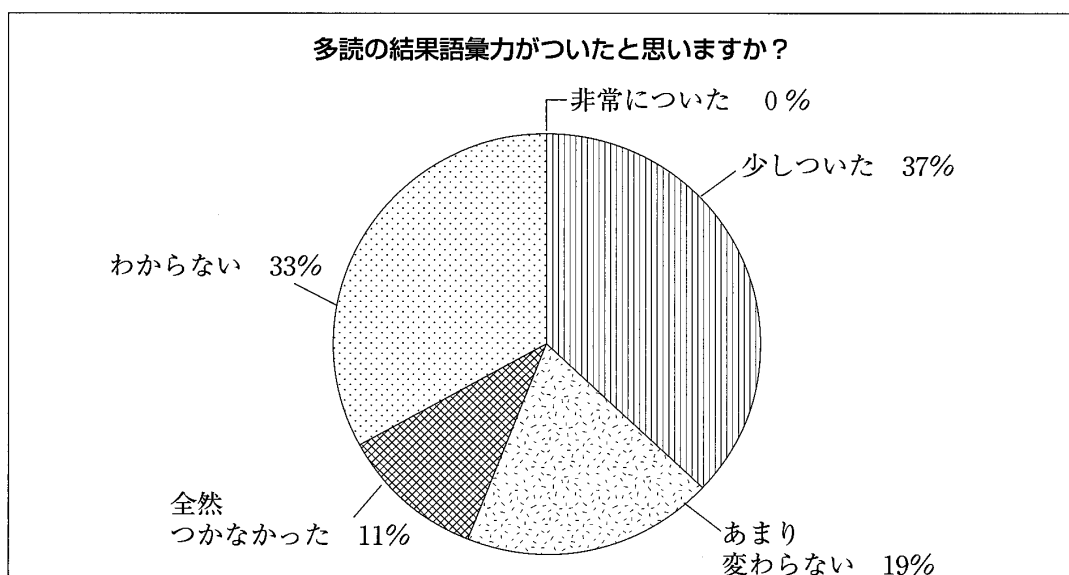
グラフ7



実際、多読による速読の効果は様々な調査で報告されており、中でも Bell (2001) の調査に顕著に現れている。Bellの調査は被験者数がやや少ないものの(26人)、精読のクラスと多読のクラスを受講した学生を比較したところ、多読のクラスの学生のほうが最終的に英語を速く読み、又、理解力も伸びており、精読のクラスより大きな成果を挙げたと報告している。このように多読は精読より読むスピード及び理解力の向上に貢献していることが分かる。

語彙への効果は、これまでの研究から多読が微量ながら語彙の増加に貢献していることが報告されている (Krashen, 1989, Horst, 2005, Coady, 1997)。しかし、その効果は期待できるほどのものではなく、Nation (1997) は多読による語彙力向上の可能性は認めつつも、短期間による多読では十分な効果は望めないとしている。実際、グラフ 8 をみても、学生自身、語彙を増やせたという意識は低い。しかしこの点、語彙力を問う客観テストを行っていないので、あくまでも学生の意識を基にした判断となっている。

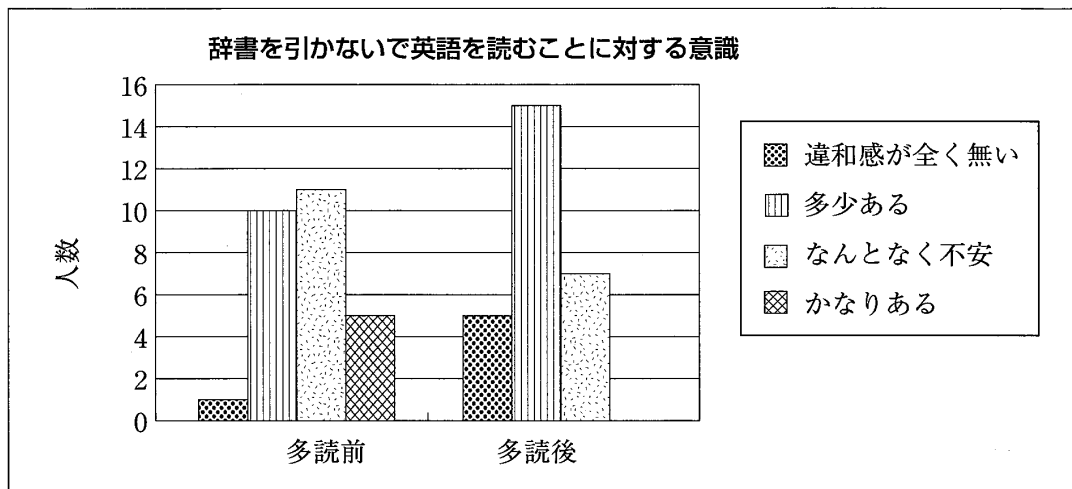
グラフ 8



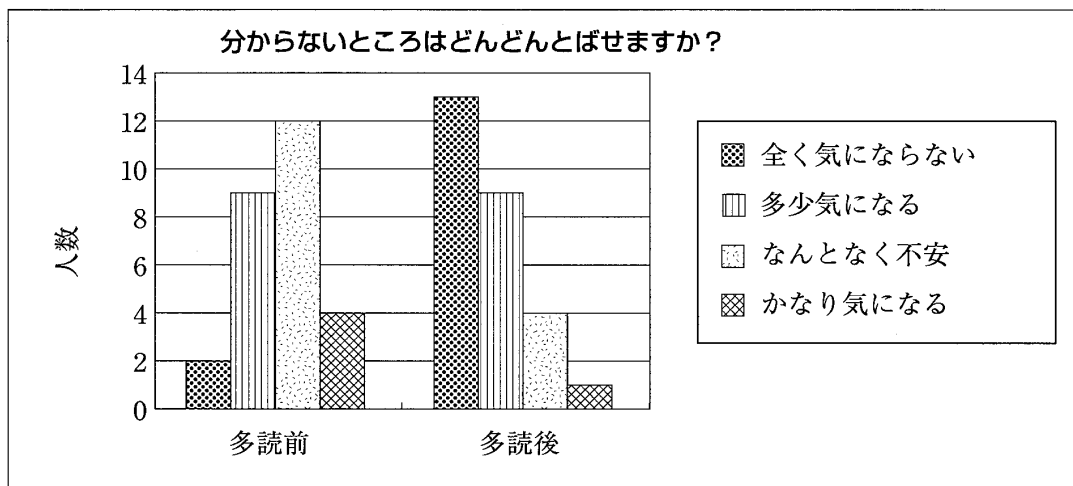
では、学生は先に述べた「SSS 英語学習法研究会の多読三原則」⁶について、どの程度意識しながら取り組んでいたのであろうか。第 1 の「辞書をひかないで英語を読むこと」に対しては、多読前では大多数 (60%) が「違和感がある」としていたのに対して、多読後は「多少違和感がある」としながらも概ね受け入れられている (76%) ようである。(グラフ 9) 第 2 の「分からないところはどんどん飛ばせる」という項目でもほぼ同じような結果が得られた。(グラフ 10) 第 3 の「面白くなかったら途中でもやめて別の本に替えられるか」と言う問いには「(替えるのに) 全く気にならない」、「時々替える」とした学生が全員 (グラフ 11) となっており、全体的に、多読の三原則が実行できたようである。

⁶ SSS 英語学手法研究会の多読三原則とは①辞書をひかない②わからない単語はとばす③つまらなかったら他の本に替える

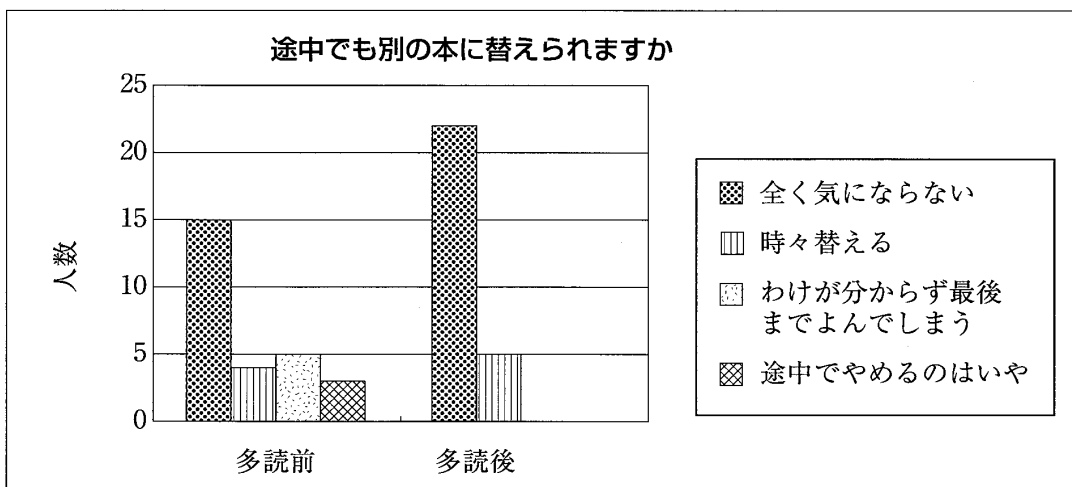
グラフ 9



グラフ 10



グラフ 11



まとめ・考察

様々なアンケートの結果を報告してきたが、概ね多読の効果は肯定的と結論付けられる。単に英語力の向上のみならず英語に対する意識の変化があらわれた点は十分に意義がある。特に、英語嫌いだった学生が興味を示すきっかけとなったことは多読の最大の効果といえる。事実、高校生の時、英語が苦手嫌いになってしまったという学生が英語の本を読めた達成感から自信がつき、積極的に読み進めていく姿は印象的であった。

さらに、この調査では言及していないが英語の本を読んだことで得られた文化的な背景は副産物である。たとえ、内容が浅い starter (あるいは初心者レベル) の本でも、日本の文化から想像しにくい内容がある為、そのことについて興味を持つことから異文化に対する理解が徐々に深められていくことであろう。読書記録の感想の中でよく「日本ではこんなことは有り得ない」とか「アメリカ人らしい発想だ」などといった意見からもその点がうかがえる。

様々な英語教育が試されているなか、授業と並行に多読を行うことで英語力をいかに効率よく向上させていくかという点では検討する余地はまだあるが、英語教育の一環として多読を導入することは英語に対してアレルギーをなくすという点において効果があると結論付けられるであろう。

リサーチの問題点

多読について一定の効果はみられたが、本リサーチにおけるいくつかの問題点も挙げておく必要がある。

まずは、185語から成る文章を読ませ、読む速さを測るテストに関しては、確かに結果が示すようにタイム自体は向上したが、その部分の正解率を多読前と後で比較していないので妥当性に欠けている。つまり、読むスピードが向上し正解率も高くなれば多読の効果として妥当性が高い結果と言えるがそれが測られていない。しかしながら、全体として正解率は向上している事から、当該部分についても一定の正解率の向上が推量される。

第二に、多読の前後のリーディングテストの信頼性がやや弱いと考えられることである。リーディングは基本的に語彙、文法、読解から構成されるが、本リサーチで使用したリーディングテストは読解力だけを焦点にした内容となっているため、細部にわたる学生の実力の判定が不可能であった。しかし、文全体の大意を把握する意味においてはある程度の効果が認められたことは疑う余地はない。また、アンケートに関して、学生は“要求”されていることに行動を合わせてしまうバイアスを持ち込んだ可能性も考えられる。⁷

⁷ オーン (Orne, 1962) は「要求特性 (demand characteristics)」という言葉を使ったが、これは研究の中で何が起きるのかということを、参加者に何らかの方法で解釈させてしまう研究状況を指している。参加者が要求特性に気づくと、それに適したように自分の行動を変化させてしまう。

第三に、被験者の数が少ないことである。2005年度は総合英語Ⅱのクラスを一クラスしか担当しなかったため27人だけが被験者となり、この人数だけから一般的な結論を導くのは早急であるように思われる。この点においては、次年度以降、被験者を増やし、今回の結果の妥当性について再び検討する予定である。

課 題

多読方法として学生の多読の進捗状況を把握するために個人面談を取り入れることは望ましいが、多読そのものの授業がない現状では非現実である。また、多読用の本の冊数に限りがあるため、様々な学生の興味やレベルに呼応した本を読ませることも難しい。できる限り学生の希望に即した対応が望まれる。多読を円滑に進めるために妨げにならない条件が揃うことを現在検討中である。

参考文献・論文一覧

- ・ Bamford, J (1993). Beyond grammar translation : Teaching students to really read. In P. Wadden (ed.), A Handbook for Teaching English Japanese colleges and Universities (pp.63-72). Oxford: University Press.
- ・ Bell, T. (2001). Extensive reading: Speed and comprehension. The Reading Matrix, 1 (1).
(Retrieved from <http://readingmatrix.com/article/bell/>)
- ・ Cho, K., & Krashen, S. (1994). Acquisition of vocabulary from the sweet valley kids series: Adults ESL acquisition. Journal of Reading
- ・ Davis, C. (1995) Extensive reading: An expensive extravagance? ELT Journal, 49 (4), 329-336
- ・ Renandya, W.A., Rajan, B.R.S., & Jacobs, G.M. (1999). Extensive reading with adults learners of English as a second language
- ・ Baika H.S. (2002) Extensive Reading in practice
- ・ Julian Bamford & Richard R. Day (2004) Extensive reading Activities for teaching language, Cambridge
- ・ Krashen, S. (1993) The power of reading: insight from the research. Englewood, CO: Libraries Unlimited
- ・ Krashen, S. (1997) The comprehension hypothesis: recent evidence. English Teachers¹ Journal, 51,17-29.
- ・ Mason, B. & Krashen, S. (1997). Extensive reading in English as a foreign language. System, 25 (1), 91-102
- ・ Krashen, S (1989) We acquire vocabulary and spelling by reading: Additional evidence for the Input Hypothesis. Modern Journal, 73, 450-464
- ・ Nashi, T., & Yuan, Y. (1992) Extensive reading for learning and enjoyment TESOL Journal, 2 (2), 27-31
- ・ Nation, P. (1997) The language learning benefits of extensive reading. The Language Teacher, 21

(5). Retrieved September22,2001,from

<http://lanuge.hyper.chubu.ac.jp/jalt/pub/tlt/97/may/benefits.html>

- ・ Tsang, W.K. (1996) Comparing the effects of reading and writing on writing performance.
- ・ Walker.C.(1997) A self access extensive reading project using graded readers (with particular reference to students of English for academic purpose). *Reading in a Foreign Language*, 11 (1), 121-149
- ・ 酒井邦秀 (2002) . 『快読100万語！ペーパーバックへの道』東京：ちくま学芸文庫
- ・ SSS 英語学習法研究会 古川昭夫（編）（2005）. 『めざせ100万語！読書記録手帳』
- ・ 萬谷隆一・谷本恭教（2004）. 「インプットを増やすための英語多読プログラムの試み」*函館英文学*, 43, 63～78. 北海道教育大学函館校出版
- ・ アン・サール著 宮本聡介・渡邊真由美訳（2005）. 『心理学研究方入門』
- ・ 鈴木寿一（1996）. 「読書の楽しさを経験させるためのリーディング指導」渡辺時夫（編）『新しい読みの指導：目的を持ったリーディング（pp.116-123）』東京：三省堂
- ・ Hfiz, F.M., & Tudor, I. (1990) . Graded readers an input medium in L2 learning. *System*, 18, 31-42

（さとう ともか 本学非常勤講師）

<付録>

読書記録

学科: フットボール	クラス: 06	学籍番号: J1-06124	氏名: [REDACTED]
出版社名: PENGUIN READERS		本のタイトル: DAVID BECKHAM	
レベル: Beginner	所要時間: 41分34秒	今回読んだページ数: 14	
合計のページ数: 14		提出日: 6月14日 17日	

これは 今回の分だけです。

1. 要約 Summary (話の内容の要点をできるだけ英語で)

DAVID BECKHAMは1975年5月2日、ロンドンのLeytonstoneで生まれた。BECKHAMは小さな頃からサッカーが好きで、足は強く、サッカーファンであり父親もサッカーをプレイしていた。テレビの広告を通して、大企業でBECKHAMは注目され、Manchester UnitedとEnglandのためにサッカーをすることを決める。そして、17歳でプロデビューし、その4年後の21歳で代表デビューを果たす。しかし、1998年のフランスW杯。対アルゼンチン戦でSimeoneの必要以上のBECKHAMに対するマークに、まだ若く怒りや悲しみを覚える。BECKHAMはキレて、Simeoneの足をけり、一発退場を喫して、その結果でBECKHAMは愛国から批判され、非常に苦しい時を過ごす。しかし、2002年の日韓W杯。対アルゼンチン戦でBECKHAMは自らPKでゴールを決め、見事奇跡を果したものである。その後BECKHAMはスペインのレアル・マドリッドに移籍したが、今はまだ、多くの人の憧れの的である。

2. 感想 (話を読んで感じたことをできるだけ英語で)

興味のある、サッカーの内容だったので楽しく読めた。この話の半分は以前から知っていたものなので、理解しやすい。この本には書かれていないが、02年の日韓W杯、イングランドがPKを獲得し、アルゼンチンのメカネが、PKをセリに行こうとするバカなプレーヤーをやりやうと、握手を求めたという出来事がある。しかし、バカなプレーヤーは、多大なる重圧のなか、PKを決め、聴衆に自らのユニフォームを見せつける姿に私は感動した。ページ数少なく、物足りなさが、このように興味のある内容のせいでもっとあるので、本を最後まで読んでほしい。後期に残りのお金で本を買おう。

3. リーディングの変化 (語彙の難しさ、読み方の変化、難易度、辞書を使ったかなど) 購入する前に前回に読んで「orca」といって、単語の難易度は変わらなかったと思う。話の内容はある程度わかっていて、難易度はそれほど高くはない。辞書は少々使用。

5 / 5